## 2 Sieve Methods

## 2.1 Inclusion-Exclusion

"Sieve method": 有限集合 S の要素数を求める方法

パターン(1)#Sを大きめに見積もり、誤差を大きめに見積もり、その誤差を…ということを繰り返し、誤差を0に近づけていく

パターン(2)  $T \supseteq S$  について,余分な元が打ち消しあうようにT の各元を重みづけする(後の節で登場)

定理 2.1.1. n 元集合 S,線形空間  $V=\{f:2^S\to K\}$  (K は体) について,線形写像  $\phi:V\to V$  を

$$\phi f(T) = \sum_{Y \supset T} f(Y),$$

で定める.このとき  $\phi^{-1}$  が存在し,

$$\phi^{-1}f(T) = \sum_{Y \supset T} (-1)^{\#(Y-T)} f(Y).$$

証明.  $\psi:V o V$  を  $\psi f(T)=\sum_{Y\supseteq T}(-1)^{\#(Y-T)}f(Y)$  で定めると,

$$egin{aligned} \phi \psi f(T) &= \sum_{Y \supseteq T} (-1)^{\#(Y-T)} \phi f(Y) & (\psi \phi f(T) \ ext{では?}) \ &= \sum_{Y \supseteq T} (-1)^{\#(Y-T)} \sum_{Z \supseteq Y} f(Z) \ &= \sum_{Z \supseteq T} \left( \sum_{Z \supseteq Y \supseteq T} (-1)^{\#(Y-T)} \right) f(Z). \end{aligned}$$

T,Z を固定したとき,m=#(Z-T) とおくと

$$\sum_{Z \supseteq Y \supseteq T} (-1)^{\#(Y-T)} = \sum_{i=0}^m (-1)^i \binom{m}{i} = \delta_{0m},$$

なので、 $\phi \psi f(T) = f(T)$  がわかる.よって  $\phi^{-1} = \psi$ .

よくある定理 2.1.1 の適用例

集合 A と,A の元が持ったり持たなかったりする性質の集合 S がある.

ちょうど  $T\subseteq S$  の性質のみを持つ A の元の個数  $f_=(T)^{*1}$ は求めにくいが,少なくとも  $T\subseteq S$  の性質は満たすような A の元の個数  $f_{\geq}(T)$  は求めやすいようなとき,

$$f_{\geq}(T) = \sum_{Y\supset T} f_{=}(Y),$$

なので,定理2.1.1より

$$f_{=}(T) = \sum_{Y \supset T} (-1)^{\#(Y-T)} f_{\geq}(Y).$$

とくに、どの性質も持たないような元の個数は

$$f_{=}(\emptyset) = \sum_{Y} (-1)^{\#Y} f_{\geq}(Y).$$
 (1)

性質を集合で言い換えることもできる.  $A_1, \ldots, A_n$  を A の部分集合とし,

$$A_T = \bigcap_{i \in T} A_i,$$

と定める( $A_\emptyset=A$  とする). $A_i$  を「性質  $P_i$  を満たす A の元の集合」と考えれば,式 (1) に対応するのは

$$\#(\overline{A_1 \cup \cdots \cup A_n}) = \#(\overline{A_1} \cap \cdots \cap \overline{A_n})$$
$$= S_0 - S_1 + S_2 - \cdots + (-1)^n S_n,$$

ただし

$$S_k = \sum_{\#T=k} \#A_T.$$

 $<sup>^{*1}</sup>$  重み  $w:A \to K$  を決めて,元の個数の代わりに元の重みの和  $\sum_x w(x)$  を  $f_=(T)$  としてもよい

包除原理やその変種は, $\cap$  と  $\cup$  ,  $\subseteq$  と  $\supseteq$  などを入れ替えることで双対形が得られる.定理 2.1.1 の双対形は,

 $\widetilde{\phi}:V o V$  を

$$\widetilde{\phi}f(T) = \sum_{Y \subseteq T} f(Y),$$

で定めるとき, $\widetilde{\phi}^{-1}$  が存在して

$$\tilde{\phi}^{-1}f(T) = \sum_{Y \subset T} (-1)^{\#(T-Y)} f(Y).$$

である. 証明も同様. 元の定理 2.1.1 について f'(T)=f(S-T) を考えることでも双対形の主張が得られる. また,高々 T の性質しか満たさない A の元の個数を  $f_<(T)$  とするとき,

$$f_{\leq}(T) = \sum_{Y \subseteq T} f_{=}(Y),$$
  $f_{=}(T) = \sum_{Y \subseteq T} (-1)^{\#(T-Y)} f_{\leq}(Y).$ 

 $f_{=}(T)$  が T の要素数によってのみ決まる場合を考える.  $i=0,\dots,n$  について

$$a(n-i) = f_{=}(T) \quad (\#T = i),$$
  
 $b(n-i) = f_{>}(T) \quad (\#T = i),$ 

とする. このとき  $0 \le m \le n$  について

$$egin{aligned} b(m) &= \sum_{i=0}^m inom{m}{i} a(i), \ a(m) &= \sum_{i=0}^m inom{m}{i} (-1)^{m-i} b(i). \end{aligned}$$

 $n=\infty$  でも上の 2 つの式が同値であることが確認できる.また,有限差分を使うと 0 < m < n について

$$a(m) = \Delta^m b(0),$$

とも表せる. a(m), b(m) の値が n に依存しないなら,任意の  $m \in \mathbb{N}$  について  $a(m) = \Delta^m b(0)$  (命題 2.2.2).

## 2.2 Examples and Special Cases

 $m{M}$  2.2.1 (攪乱順列). 順列  $w\in \mathfrak{S}_n$  であって,不動点を持たない (orall i) w(i) 
eq i ものはいくつあるか?そのような順列(攪乱順列)の個数を D(n) とおく.

少なくとも  $T \subset [n]$  の点が不動点であるような順列の個数は

$$f_{>}(T) = b(n-i) = (n-i)! \quad (\#T = i).$$

したがって,不動点を持たない順列の個数  $f_=(\emptyset)=a(n)=D(n)$  は

$$D(n) = \sum_{i=0}^{n} {n \choose i} (-1)^{n-i} i!$$

$$= n! \left( 1 - \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} - \frac{1}{3!} + \dots + (-1)^{n} \frac{1}{n!} \right).$$

これより n!/e が D(n) の良い近似であることが分かる.実際,n>0 について  $D(n)=\mathrm{round}(n!/e)$  が確認できる. $^{*2}$ 

$$\left|D(n)-rac{n!}{e}
ight| \leq rac{1}{n+1} + rac{1}{(n+1)(n+2)} + rac{1}{(n+1)(n+2)(n+3)} + \cdots$$
 右辺を  $g(n+1)$  とおくと, $g(n+1) = ng(n) - 1~(n\geq 1)$  より  $g(1)=e-1pprox 1.718$ , $g(2)pprox 0.718$ , $g(3)pprox 0.436$ , $g(4)=0.308$ , $\ldots$  WolframAlpha によると  $g(n)=e(\Gamma(n)-\Gamma(n,1))=\int_0^1 t^{n-1}e^{-t}dt$  で,これは  $n\geq 1$ 

また,n > 1 について

$$D(n) = nD(n-1) + (-1)^n,$$

これを繰り返し使って

$$D(n) = nD(n-1) - (-1)^{n-1}$$

$$= nD(n-1) - (D(n-1) - (n-1)D(n-2))$$

$$= (n-1)(D(n-1) + D(n-2)).$$

D(n) の指数型母関数は

$$\sum_{n>0} D(n) \frac{x^n}{n!} = \frac{e^{-x}}{1-x}.$$

**例 2.2.3.** 多重集合  $M_n=\{1^2,2^2,\ldots,n^2\}$  の順列のうち,どの 2 つの隣接する項も等しくないものの個数を h(n) とおく. h(0)=1,h(1)=0,h(2)=2.

順列 w に対して,性質  $P_i$  を「2 つの i が隣接すること」とする.求める値は  $f_=(\emptyset) = h(n)$ .

$$g(i) = f_{>}(T) (i = \#T)$$
 とおくと

$$g(i) = \frac{(2n-i)!}{2^{n-i}}.$$

したがって、

$$h(n) = \sum_{i=0}^{n} {n \choose i} (-1)^{n-i} (n+i)! 2^{-i}$$
$$= \Delta^{n} (n+i)! 2^{-i} \big|_{i=0}.$$

について単調減少.また |D(1)-1!/e|=|0-1!/e|<1/2.n=0 については D(0)=1 なので不成立.

例 2.2.4. 順列  $w=a_1a_2\cdots a_n\in\mathfrak{S}_n$  について descent set D(w) を

$$D(w) = \{i : a_i > a_{i+1}\},\$$

で定める. また,

$$\alpha_n(S) = \#\{w \in \mathfrak{S}_n : D(w) \subseteq S\},$$

$$\beta_n(S) = \#\{w \in \mathfrak{S}_n : D(w) = S\},$$

とする. このとき

$$lpha_n(S) = \sum_{T \subseteq S} eta_n(T),$$
  $eta_n(S) = \sum_{T \subseteq S} (-1)^{\#(S-T)} lpha_n(T).$ 

また,  $S = \{s_1, \ldots, s_k\}_{<} \subseteq [n-1]$  のとき

$$lpha_n(S) = egin{pmatrix} n \ s_1, \ s_2 - s_1, \ s_3 - s_2, \ \dots, \ n - s_k \end{pmatrix}, \ eta_n(S) = \sum_{1 \leq i_1 < i_2 < \dots < i_j \leq k} (-1)^{k-j} egin{pmatrix} n \ s_{i_1}, s_{i_2} - s_{i_1}, \dots, n - s_{i_j} \end{pmatrix}.$$

 $s_0 = 0$ ,  $s_{k+1} = n$  とすると,

$$eta_n(S) = n! \det \left[ rac{1}{(s_{j+1} - s_i)!} 
ight]_{(i,j) \in [0,k] imes [0,k]}$$

と書き換えられる(ただし  $i \geq j$  について (i,j)-成分は 0 とする). さらに n! を各列にばらすと

$$eta_n(S) = \det \left[ egin{pmatrix} n-s_i \ s_{i+1}-s_i \end{pmatrix} 
ight],$$

が得られる.

**例** 2.2.5.  $S = \{s_1, \ldots, s_k\} \subseteq [n-1]$  について,

$$\sum_{\substack{w \in \mathfrak{S}_n \ D(w) \subseteq S}} q^{s(w)} = egin{pmatrix} n \ s_1, s_2 - s_1, \dots, n - s_k \end{pmatrix}$$

が成り立つような s(w) を考える.実は  $s(w) = \operatorname{inv}(w)$  とすると上の等式が成り立つ.

$$t_1 = s_1, t_2 = s_2 - s_1, \ldots, t_{k+1} = n - s_k,$$

とし,

$$M = \{1^{t_1}, 2^{t_2}, \dots, (k+1)^{t_{k+1}}\},\$$

とおく. 命題 1.7.1 より

$$\sum_{u \in \mathfrak{S}(M)} q^{\mathrm{inv}(u)} = egin{pmatrix} n \ t_1, t_2, \dots, t_{k+1} \end{pmatrix}.$$

 $u\in \mathfrak{S}(M)$  について,u の要素に対して小さい順に番号を振りなおして, $\mathrm{inv}(u)=\mathrm{inv}(v)$  となるように  $v\in \mathfrak{S}_n$  をとる(例: $u=12112\Rightarrow v=14235$ ). $w=v^{-1}$  とおく.

このようにしてとれる  $w \in \mathfrak{S}_n$  は  $D(w) \subseteq \{s_1,\ldots,s_k\}$  を満たす.逆に, $w \in \mathfrak{S}_n$  について  $D(w) \subseteq \{s_1,\ldots,s_k\}$  が成り立つなら,対応する $u \in \mathfrak{S}(M)$  がただ一つ存在する.よって示された.

$$eta_n(S,q) = \sum_{\substack{w \in \mathfrak{S}_n \ D(w) = S}} q^{\mathrm{inv}(w)},$$

とおくと,例 2.2.4 と同じ議論により

$$eta_n(S,q) = (n)! \det \left[ rac{1}{(s_{j+1} - s_i)!} 
ight]$$

$$= \det \left[ {n - s_i \choose s_{j+1} - s_i} 
ight].$$

上の議論を一般化して,次の結果が得られる.

**命題 2.2.6.**  $S = \{P_1, \ldots, P_n\}$  を性質の集合とする.また h を  $\mathbb{N}$  上の関数 とし,e を  $\mathbb{N} \times \mathbb{N}$  上の関数であって e(i,i) = 1,e(i,j) = 0 (j < i) が成り立つものとする.

各 $T\subseteq S$  について, $T=\{P_{s_1},\ldots,P_{s_k}\}\;(1\leq s_1<\cdots< s_k\leq n)$  とおくと

$$f_{<}(T) = h(n)e(s_0, s_1)e(s_1, s_2) \cdots e(s_k, s_{k+1}),$$

が成り立つとする(ただし  $s_0=0$ , $s_{k+1}=n$  とする).このとき

$$f_{=}(T)=h(n)\det[e(s_i,s_{j+1})].$$